

通し番号	4770
------	------

分類番号	27-35-13-02
------	-------------

県西部で発生するウメ枝枯症状は灰星病が主因であり、適正な防除管理で被害を軽減できる	
[要約] 神奈川県西部を中心に発生しているウメの一年枝における枝枯症状は <i>Monilinia laxa</i> によるウメ灰星病である。本病原菌に感受性が高い‘十郎’において、開花前までの罹病枝の除去および二分咲時と満開時の計2回の薬剤散布により被害を軽減できる。	
神奈川県農業技術センター生産環境部、足柄地区事務所	連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

平成24年頃から神奈川県西部のウメ生産園地において、‘十郎’を中心に発生している一年枝の枝枯症状の原因を特定し、総合的な防除対策を構築する。

[成果の内容・特徴]

- 1 神奈川県西部で発生しているウメ枝枯症状（図1）の主な原因は *Monilinia laxa* によるウメ灰星病である。本病原菌は2月下旬頃から花卉に進入する。一部の園地では *M. fructicola* が発生している（データ省略）。
- 2 灰星病の発生には品種間差があり、‘十郎’が特に発生しやすい（図2）。
- 3 罹病枝の除去により、翌年の灰星病の発生を抑制できる（図3）。
- 4 開花中の二分咲時と満開時の計2回の薬剤散布は防除効果が高い（図4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 ウメ灰星病は‘竜峡小梅’と‘信濃小梅’で発生が多い報告がある。
- 2 ウメ灰星病は‘十郎’が特に発生しやすいため、‘十郎’が園地内にある場合は、‘十郎’の開花適期に合わせて防除する。
- 3 薬剤散布が満開時にできなかった場合は花落期までにおこなう。
- 4 平成27年に県内で採取した灰星病菌 *Monilinia laxa* (50菌株) と *M. fructicola* (12菌株) は、チオファネートメチル、イプロジオンおよびオキシポコナゾールフマル酸塩に対してすべて感受性であった。
- 5 チオファネートメチル、イプロジオンおよびオキシポコナゾールフマル酸塩は比較的薬剤耐性菌が発生しやすい薬剤であるため、同系統薬剤の使用は1作1回以内が望ましい。
- 6 有効薬剤や薬剤の系統などは神奈川県病害虫雑草防除指導指針を参照。

[具体的データ]

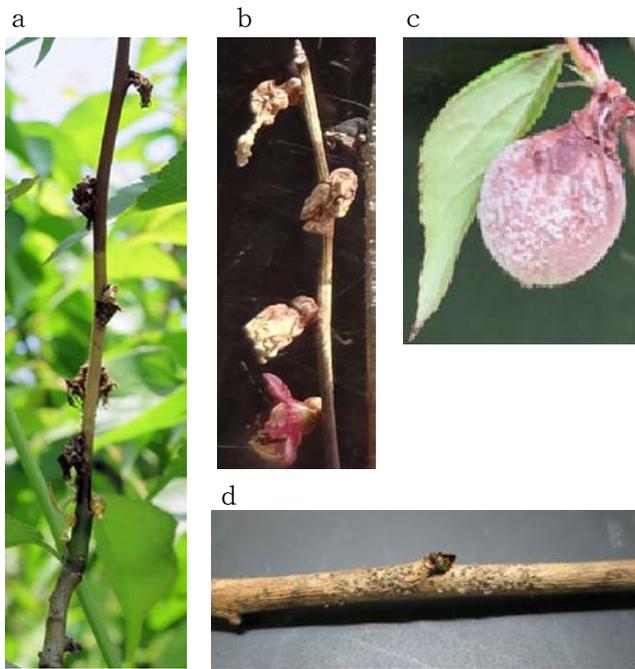


図1 現地で見られたウメ枝枯症状

a : 枝枯症状、b : 花腐症状、c : 幼果での発病（非常にまれな発生）、d : 枝枯部分での分生子堆。

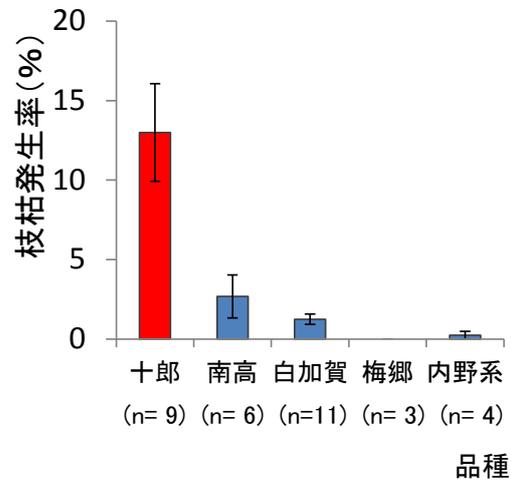


図2 品種と一年枝枯発生率との関係

図中のnは調査本数を示す。エラーバーは標準誤差。

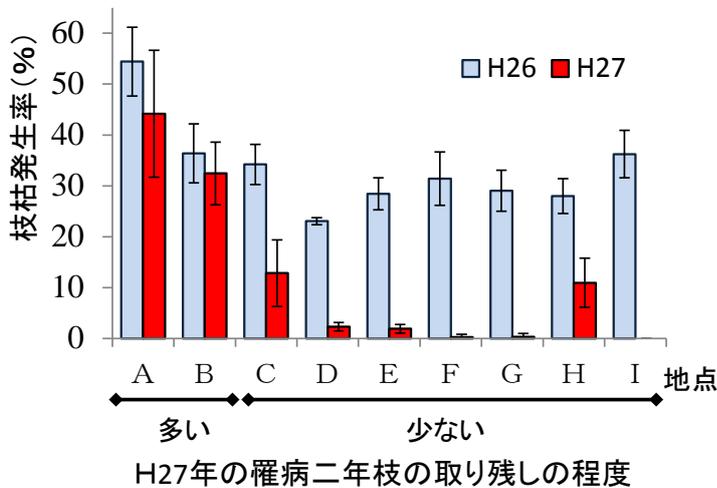


図3 前年の枝枯部位の除去程度と一年枝枯発生率の関係

図中のH26とH27はそれぞれ平成26年と平成27年4月調査時の一年枝枯発生率。調査対象は‘十郎’。エラーバーは標準誤差。

[資料名] 平成27年度試験研究成績書（生産環境）

[研究課題名] 診断・同定及び防除技術の確立

[研究期間] 平成27年度

[研究者担当名] 岡本昌広・折原紀子・中島修・島田涼子・曾根田友暁

[協力・分担関係] 生産環境部・足柄地区事務所

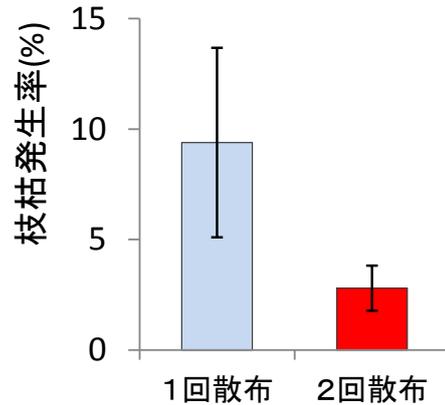


図4 開花期間中の散布回数と一年枝枯発生率との関係

1回散布は二分咲時、2回散布は二分咲と満開時。二分咲時の散布薬剤はイミノクタジンアルベシル酸塩水和剤、満開時の散布薬剤はオキスポコナゾールフマル酸塩水和剤。防除対策前（前年度）の枝枯発生率は33.5%。調査対象は‘十郎’。エラーバーは標準誤差。